

10代の母という 生き方 ⑫

大川 聡子

★まえがき

マガジン 14～19号で若年母親へのインタビューを基に、母親が持つ社会的経験の特徴について記述しました。21号からは、これまでのインタビューをまとめた考察をしています。

今号では、地域において若年母親がどのようなインフォーマルもしくはソーシャルサポートを受けていたのかを分析します。Borkowski(2007)は、母親としての適応、父親の関わり、社会サービス、子どもの学校での体験や学級での調整の4つの要素に焦点を当て、若年母親の子育てと回復モデルを作成しました。その中で、子育ての質に影響を与えるのは、父親の関わりや、家族や地域などのソーシャルサポート、母親としての適応等、母親を保護する要因であるとしています。本稿の対象者は、子どもが乳幼児であったため子ども自身の体験については明らかになりませんでした。若年母親が母親としての適応(本稿では“若年母親として自己肯定感を高める”と定義)を成し得ていく上で重要な要素をインタビューデータから抽出し、[図6]にまとめました。

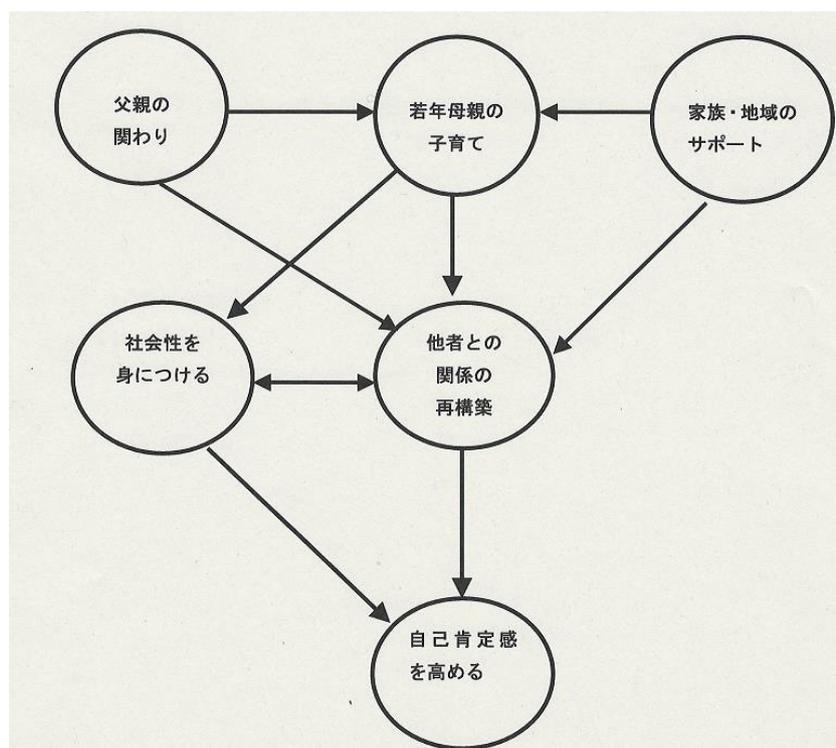


図6 若年母親の発達とソーシャルサポートの関連

本研究では、母親が自己肯定感を高めるために重要な要素を、家族・地域のサポート、父親の関わり、社会性を身につける、他者との関係の再構築の4つとしました。

母親は、父親の関わりや、家族・地域のサポートを受け育児を行なっています。若年母親はライフサイクルが交錯する存在であることから、夫、義父母、年上の母親や周囲の人々等、多くの人々との間に摩擦を起こしますが、これらの人々とうまく折り合いをつけ、母親として関係を再構築しようとしています。また、生活習慣の変化や将来の生活設計を立てることから、社会性を高めることもできるようになっています。こうした、他者との関係の再構築や社会性を高めることが、若年母親としての自己肯定感を高めることに寄与していると考えられます。

また、若年母親は出生地と現在の居住地が近く、地域の同年代の母親を一人も知らないという人はおらず、地域での若年母親ネットワークを形成しやすい状況にありました。このことから、若年母親は周囲の人との絆を感じやすい状況にあると言えます。

こうした背景に、日本の若年母親に対する社会資源の貧弱さが垣間見えます。出産した母親に対して復学や就労支援などの社会的サービスが乏しいために、彼女達は、家族のために自らの時間やエネルギーを使わざるを得ない状況にあります。このため若年母親は、個人としてでなく母親として自らの時間やエネルギーを使い、母親となることで周囲との関係を構築していると考えられました。

Borkowski(2007)が述べたように、本稿でも父親の関わりや家族・地域のサポートが若年

母親の子育てに果たす役割は大きいものでした。父親は、どのケースでも育児に積極的に関わっていたわけではなく、家族のサポートを得られず育児をしているケースもありました。若年母親の支援は、父親だけでなく祖父母も含めた家族に回収せざるを得ない状況にあります。家族の力量には差が大きく、その力量により母親の育児負担は大きく変化します。

しかし、たとえ若年母親の育児を家族が支えることができたとしても、家族による育児の抱え込みは、家族の私事化を強化させ、「コミュニティからの家族の離脱」(中村, 2001)をもたらし、〈必要以上に他人を頼らない〉、〈初対面で心を開けない〉といった特徴を持つ若年母親の他者との関係構築の機会を奪ってしまうことになるでしょう。さらに、これまで示したように、母親たちの原家族である、甘えられない、困りごとを相談できない家族を再生産していく恐れもあります。また、中根(2006)は家族による介護に「時間の限界性」を指摘しているが、育児においても長期間の身体的、精神的、経済的負担がかかることとなり、若年母親の親達がこうした長期にわたる育児を支えられる保証はどこにもありません。若年母親の育児を地域で支える道筋をつけることは、若年母親自身の社会化だけでなく、地域住民にも若年母親の理解を促進することができ、偏見の緩和につながるでしょう。また若年母親家族の育児負担を緩和することもできるため、重要な取り組みであると考えます。

今回のインタビューにおいて家族以外に若年母親を支えていたのは、地域におけるインフォーマルサポート及び社会的支援でした。地域において若年母親が社会的支援とつながり、地域住民の理解を促すためにはどのような方法があるのでしょうか。次号では、若年母親に関わる地域住民ボランティアへのインタビューを行ない、若年母親と関わることによるボランティアの認識及び関わり方の変化を明らかにし、住民との関係構築を促す方法について考察したいと思います。

★引用文献

Borkowski, J. G., 2007, Risk and Resilience, adolescent mothers and their children grown up, Lawrence Erlbaum associates publishers.

中村正, 2001, ドメスティックバイオレンスと家族の病理, 作品社.

中根成寿, 2006, 知的障害者家族の臨床社会学—社会と家族でケアを分有するために, 明石書店.